



## 「読むのが先か、観るのが先か」

阿川敏恵 英語コミュニケーション学科

多くの小説が映画化されたり、ドラマになったりしている。「観るのが先か、読むのが先か」と言われれば、私は「読むのが先」だと思う。しかしこの議論に入る前に、私が本を読むことに対してどんな風に思っているかをお話しておこう。映画やドラマ、劇も大変おもしろいが、たいていの場合、本の方がおもしろい。なにしろ本は「お得」である。「お得」なことは、主にふたつある。まず、たいていの場合、映画やドラマを観るより、本を読んだ方が細かい描写をじっくり楽しんだり、より多くの情報を得たりできる。映画などは上映時間がある程度決まってしまうから、重要でない監督が判断した場面が削られてしまうことが多い。ひどい場合には、映画では展開がはやすぎて、原作を読んでいないと話についていけないことがある。次に、本を読むと自分の自由な想像の世界が広がる。映画の場合、自分のタイプではない俳優が主役だと、作品そのものに対する興味が失せてしまう。いっぽう本だと、自分の想像や好みで、登場人物の容姿や声を仕立て上げることができる。とにかく、自分の世界にどっぷりと浸るという快感を味わえるのである。

それでもたまに、私は映画や劇を観に行くことがある。才能あふれる映画監督や劇の演出家は時々、私の思いつかなかったような表現方法で驚かしてくれるし、映像は一瞬にして大きな刺激を与えてくれることがあるからである。それに、本を読んで自分の作り上げた世界と、映画監督や演出家の世界を比べるのは、なかなか面白い。しかし、先に映画や劇を観てしまうとなかなかそうはいかない。視覚からの強烈なイメージがじゃまして、自分だけの想像の世界を作り上げられなくなってしまうのだ。

だから私はいつも先に本を読む。自分の世界(本)と、他人の世界(映画等)を両方楽しむには、読む→観る、の順番が良いのである。

(阿川先生おすすめ本)

『ヘルプ-心がつなぐストーリー』(集英社文庫)(上・下)

ストケット キャスリン(Stockett Kathryn)著 栗原 百代訳 集英社 2012.2

## 『ピーター・パンとウエンディー』

ジェームズ・マシュー・バリ著

松谷星香 文化学科3年

〈子どもはみんな、一ひとりだけはべつですが一大きくなります。そして、やがて自分でも、大きくなることに気がつきます。〉

(J.M.バリ著/厨川圭子訳『ピーター・パン』岩波書店より)

ジェームズ・マシュー・バリの『ピーター・パンとウエンディー』、1953年にウォルト・ディズニー・カンパニーによって映像化されました。ディズニーを通してご存じの方も多いのではないのでしょうか。私自身映画でこの作品を知りました。原作を読んだのは大学生になってからです。今までは児童文学であることから手が伸びずにいたのですが、いざ読むとピーター・パンの魅力に取りつかれ、何度も読み返しました。

ディズニーの映画では、正義のヒーローが悪を倒すという二項対立の、ハッピーエンドで終わる子ども向けのお話とされているのに対して、原作の『ピーター・パンとウエンディー』は、子どもと大人、二つの存在に焦点を当てた極めて大人向けのお話です。ここでは、成長を望むウエンディーと永遠に子どものままでいたいピーターを対比させ、それぞれの幸福と手に入らない喜びが描かれています。決して幸せなだけの物語ではありません。寓意が様々なところにちりばめられていて、一度目を通しただけでは理解できない深い作品です。

ピーター・パンは、現在多く映像化され、子ども向けに書き換えられた本なども出版されています。ぜひ、原作にも触れてみて下さい。大学生となり、大人になった今だからこそ感じるものがあると思います。個人的には先に本を読むのがお勧めです。



## 『ゴールデンランバー』

伊坂幸太郎著

生沼千明 人間環境学科2011年度卒業

私は結末が見えていると、なかなかその本に手が出せない。先に映画で映像として観てしまうと、本を読み進めるたびに観た映像が思い出され、想像力が狭められ、本来よりも本の魅力を感じとれないと思えるからである。この『ゴールデンランバー』もやはり本から入ることにした。

仙台を舞台に主人公の青柳が首相暗殺の濡れ衣をきせられ、暴力も辞さない追手集団から必死の逃走を行う。第1～2部ではニュース視聴者の目から事件が語られ、第3部では事件から20年後としてライターが事件の謎を掘り起こす。第4部では青柳目線で2日間の逃走劇の実態が描かれ、第5部では事件から3カ月後の登場人物たちの後日談。すべての伏線が回収され、爽快感と共に感動の結末を迎える。キーワードは、ビートルズの歌の「ゴールデンランバー」、ケネディ暗殺犯とされる「オズワルド」、友の言葉の「習慣と信頼」。

読了後、早速映画を鑑賞した。やはり時間の制約で構成変更はあるが、重要場面である打ち上げられる花火の効果音はより迫力を感じられ、主題歌「ゴールデンランバー」の歌がより感動を促す。この映画特有の効果は、私のこの小説に抱く世界観に絶大な影響を与えた。観賞後、すぐ読み直そうと考えた。映画の場面を思い返しながらだと、また別の見方が楽しめる。原作の魅力が相乗効果で増したと思えた。ただ、小説を読み、映画では描かれていない設定を知っているからこそ楽しめた部分が大い。

この作品の「小説」と「映画」両方をぜひ楽しんでもらいたい。そのためには、断然「読むのが先」である。伊坂作品のファンとして、おススメします。



■ おすすめの作品を読みたく(観たく)なった人へ...

### 『ヘルプー心がつなぐストーリーー』

#### 小説

ストックett・キャスリン (Stockett Kathryn) 著 栗原 百代訳 集英社 2012.2

1962年、大学を終えて故郷に戻ったスキーターは、改めて南部の差別的風土に衝撃を受ける。同級生はほとんど主婦になったが、家事・育児を酷い待遇で雇ったヘルプ=黒人メイドに任せきり。作家志望のスキーターの頭に探していたテーマが閃いた。ヘルプを取材し差別問題を浮彫りにするのだ。しかし、白人と個人的に話すのさえ命がけだった時代はヘルプ達頑なで...。全米1130万部のミリオンセラー。(「BOOKデータベース」より抜粋)

#### 映画

劇場公開 2012. 3. 31.

監督は「ウィンターズ・ボーン」などにも出演している俳優のテイト・テイラー。第84回アカデミー賞で、オクタビア・スペンサーが助演女優賞を受賞した。

#### 小説

### 『ゴールデンランパー』

伊坂幸太郎著 新潮社 2007.11

「おまえは、陥れられている。今も、その最中だ」「金田はパレード中に暗殺される」「逃げる!オズワルドにされるぞ」と、鬼気迫る調子で訴えた旧友の森田森吾。訝る青柳に、遠くで爆音がし、折しも現れた警官は、青柳に向かって拳銃を構えた。精緻極まる伏線、忘れがたい会話、構築度の高い物語世界、伊坂幸太郎のエッセンスを濃密にちりばめた、現時点での集大成。第5回本屋大賞、第21回山本周五郎賞を受賞した。

(「BOOKデータベース」より抜粋)

#### 映画

劇場公開年 2010

監督・脚本は中村義洋。これまでも『アヒルと鴨のコインロッカー』『フィッシュストーリー』など伊坂の作品を手がけている。主演は堺雅人。小説の舞台である仙台でロケが行われた。

#### 小説

### 『ピーター・パンとウエンディ』

ジェームズ・マシュー・バリ著 1911.

1904年初演され、大ヒットした劇『ピーター・パン』を物語のかたちに改めたもの。

\* 参考文献『小さな白い鳥』(ジェームス・バリ著 パロル舎 2003)

#### アニメーション

1953.2.10.にアメリカ合衆国で公開されたディズニーの長編アニメーション作品。

日本では1955.3.22.に公開された。

#### 映画

「ピーター・パン」劇場公開年 2003

監督はP・J・ホーガン。戯曲『ピーター・パンあるいは成長しつづける男の子』

小説『ピーター・パンとウエンディ』に基づいたストーリー。2004年に日本公開。

\* 参考文献『キネマ旬報』No.1403 2004

「ネバーランド」劇場公開年 2005

『ピーター・パン』の作者バリの伝記的映画。ジョニー・デップ主演。小説『ピーター・パンとウエンディ』の映画化作品では無いが、小説の生まれた背景がわかる。

\* 参考文献『キネマ旬報』No.1421 2005